



事例2 東京都目黒区立

不動小学校

教師自らが学習モデルとなり、子どもの「相手意識」を育む

ビンゴゲームで前回の学習を復習 楽しみながら学習項目を定着させる

“What do you want to be?”

“I want to be a baker.”

「あ、ビンゴ!」。教室のあちこちから、歓声や笑い声が響いてくる。

ここ不動小学校は、平成28・29年度と目黒区の教育開発指定校に選ばれ、「外国語活動を通じてコミュニケーションを楽しめる児童の育成」を目標に掲げて教育活動を推進している。

この日、訪れたのは6年生のクラス。担任の平林幸先生がメインとなり、ALTのMathew Ensign先生がアシスタント的な役割を務める。前回の授業で習ったフレーズの復習として、ビンゴゲームの真っ最中だ。

子どもたちは4人のグループに分かれて机を寄せ合う。3人の前にはそれぞれ、職業の絵が書いてあるカードが縦3枚、横3枚、合計9枚ずつ並べられている。それをビンゴに見立て、

3人で“What do you want to be?”と聞くと、残りの一人が手持ちの絵カードを引いて、“I want to be a doctor.”などと答える。3人は、その職業カードがあれば裏返し、縦横斜めのいずれか3枚がそろったところで「ビンゴ」となる。

高学年ともなると、こうしたゲームには消極的ではないかという懸念も何のその、元気なかけ声が飛び交い、皆とても楽しそうだ。何より、復習したいフレーズを何度も繰り返すことになるので、自然と英語が定着していくのがわかる。

授業力と英語力の向上を目指して 教員どうし、学び合いの機会を設ける

小学校で英語が教科化されると聞いたとき、平林先生が真っ先に感じたのは「不安」だ。



特集 どうやって？ 授業をつくる？

ゲームをしながら、前回の授業内容を復習。「ビンゴ」になって、思わずガッツポーズ!

「私は英語が苦手でしたし、好きではありませんでした。これまでは、モデルカリキュラムをもとに授業を進め、ALTに任せる部分も多かったのです。でも、教科になることで、子どもたちにどう教えればいいのかと頭を抱えたのと同時に、自分は変わらなくてはいけないのだろうかと不安に思いました」。

その思いは、平林先生だけではなかったはずだ。学校が目黒区の教育開発指定校になったのを機に、校内で授業研修部、環境整備部、資料研究部が発足し、外国語活動を支える基盤が徐々に整っていった。教員の研修は「授業力の向上」と「英語力の向上」の2本柱で実施。各学年が1本ずつ研究授業を行い、授業力向上を目指すのと同時に、月に2回、英語の研修会を開催し、英語力の向上を図る。

「授業研修部の教員が持ち回りでテーマを決め、市販のDVD教材を活用しながら、クラスルーム・イングリッシュのトレーニングなどを行っています。とても和気あいあいとした雰囲気ですよ」と話すのは、東京都英語教育推進リーダーも務める飯田一平先生だ。研修会のほか、ALTとのフリートークで英語力を磨く「イングリッシュ・カフェ」など、教員たちの英語への抵抗感をなくそうという活動も盛んだ。

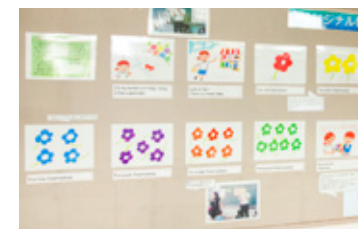
「外国語の教科化が打ち出されたときは、現場がとまどうことは少なからずありましたが、最近では、児童の実態に合わせて、教員が自分なりに授業を組み立てられるようになってきたと感じています」(飯田先生)。

声の大きさと理解度合いがわかる 普段の様子を知っている担任の強み

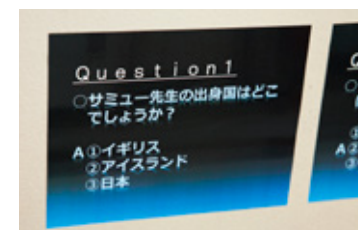
では、平林先生はどのように授業を組み立てているのだろう。

校内には英語がいっぱい!

子どもたちが普段の学校生活でも英語に触れられるよう、校内には英語があふれている。環境整備部の先生方が中心となって行っている活動だ。



学年に合わせて先生方がオリジナル教材を作成している。



ALTを身近に感じてもらうと、先生にまつわるクイズも。



階段は貴重な掲示スペース。月曜日は、海の生き物などの英単語が目に入る。

「まず最終ゴールを決めてから、キーセンテンスを考えます。そして、その文章を入れるためにはどんな順序で教えるべきか、どんなアクティビティが必要かを考えます」。

今回は「自分の将来の夢をスピーチで発表する」ことをゴールに見据え、8回の授業で完結させる予定だという。取材で訪れたのは3回目の授業だ――。



デモンストレーションを行う平林先生とマシュー先生。

ビンゴゲームで復習した後、いよいよ今日のフレーズ「I am good at ~」を学習する。まずは文部科学省作成の教材『We Can! ②』を使い、マシュー先生が3人の登場人物の会話を読

み上げる。そこから、3人の将来の夢とその理由を書き出していくのだ。勤のいい児童は、ここで「good at」が得意なことを表すことに気づく。平林先生が今日のゴールについて解説した後、そのフレーズを使ったデモンストレーションをマシュー先生と行った。

「ALTとのデモンストレーションは必ず取り入れています。まず音を聞いてほしいと思うからです。音が入らないと、子どもたちは発話できません。たまに、英語をリピートさせても声が小さいことがあるのですが、それは恥ずかしいからではなく、自信がないから。声の音量で子どもたちの理解度がわかるのです」(平林先生)。

それは、普段の子どもたちの様子を知ってい

る担任ならではのチェック機能といえそうだ。「英語が得意ではない」と話す平林先生だが、クラスルーム・イングリッシュを使いこなし、スムーズに授業を進めているように見える。

「事前の準備はしっかり行います。子どもたちに英語を少しでもおもしろいと思ってもらいたいので、心がけているのは、いろいろなアクティビティを取り入れて、バラエティ豊かな活動を展開すること。自分自身の英語力については、まだまだ勉強中です」。

授業の組み立てについて、ALTと密にコミュニケーションを取るが、言いたいことが英語で言えないもどかしさを感じることもある。でも、それこそが、子どもたちが感じている気持ちなのかもしれない。飯田先生はこう話す。

「英語が苦手な先生は、『よい学習者モデル』になれるという利点があると思います。子どもの目線に立ち、ときにはALTに「Slowly please.」「Pardon?」と聞いて、子どもたちも質問しやすい環境をつくることも大切です。先生の中には、発音や文法の間違いを気にして話すことをためらう方もいらっしゃいますが、小学校の外国語活動は「伝える」ことが肝要。子どもたちが相手の気持ちを考え、どうやったら相手に伝わるのか、『相手意識』をもつことが、英語に限らず小学校教育の要なのです。だから、先生の英語が完璧である必要はありません」。

子どもたちと一緒に勉強していこうという先生の姿は、実際に、子どもたちにもいい影響を与えている。飯田先生も大きな手ごたえを感じているようだ。

外国語活動を通じて学んでほしい豊かなコミュニケーション

さて、授業は最後のアクティビティに入った。マシュー先生が「I am good at painting.」と言ったら、「artist」の絵カードを掲げるという活動だ。「I am good at arranging flower.」「Florist!」少し難しい単語が出てきても、前後に出てくる既知の単語から推測する子どもたちの様子が頼もしい。この後、今日のフレーズを全員で発音練習し、各自が授業の振り返りを行った。

「good at」の「at」の発音が難しかった。「good at」のdとaが続いているので、発音しにくかった」など、音に着目した意見が多く挙げられた。平林先生が日頃、耳で聞くことを重視しているのが奏功したのかもしれない。

「音を大切にすることというのは、相手の話を聞くことにもつながってくるものだと思います。英語力をつけることも大事ですが、外国語活動を通じて、コミュニケーションの取り方、相手意識の大切さを学んでほしいと願っています」。平林先生はそう話す。

6年生の中では、「中学校で英語を勉強するのが楽しみ」と口にする子どもたちが増えているようだ。それは、先生たちにとって何よりうれしい言葉に違いない。



これまでの学習の記録が収められているENGLISHファイル。

授業の流れ



1. 挨拶

クラス全員で「Please come in.」とALTを迎え、今日の天気や日にち、曜日などを確認。子どもたちは、英語の授業だからと構えることなく、自然体だったのが印象的。



2. 前回の復習

前回の授業で習ったフレーズを確認し、ALTの後に続けて、全員で声に出して言う。その後、ビンゴゲームで、さらに定着させる。教室内は歓声や笑い声に包まれた。



3. 今日のフレーズの導入

テキストに登場する3人の人物の会話をALTが読み、それぞれの「将来の夢」と「その理由」を聞き取って、表を完成させる。今日のフレーズは「I am good at ~」だ。



4. ゲームで練習

ALTが「I am good at ~」と得意なことを話したら、子どもたちは将来になりたい職業を当てる。分かったら絵カードを持って挙手。子どもたちの競争心も刺激される。



5. 発音練習

ALTのお手本の後、全員でリピート。前回、今回と習ったフレーズを使って、たくさんの文章を声に出す。難しい単語が出てきた場合は、平林先生が日本語でフォロー。



6. 振り返り

「英語振り返りカード」に、今日の授業でわかったこと、よかったことなどをまとめる。どの子どもも真剣な表情。音声に関する感想や気づきがあったようだ。

